

# 湖北陰翳礼讚

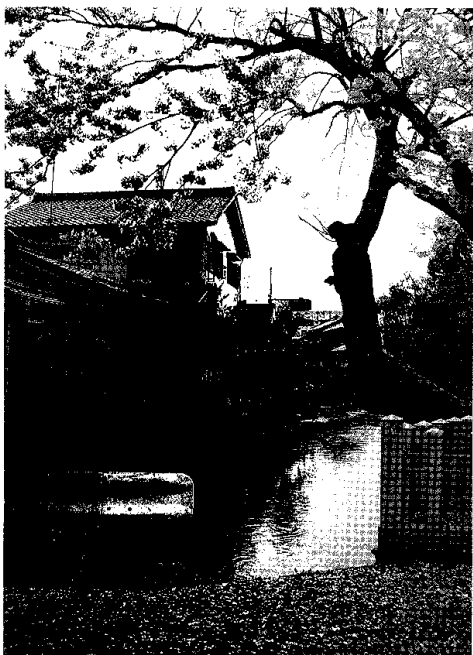
田舎町の小さな冊子が、どうしてこれほど多様な、時には著名な人々の珠玉の随想で巻頭を飾ることができるの？ 大なる疑問である。

今号は、いつてみれば「湖北の光と影の博覧会」の様相を呈している。陳列棚の活字群に改めて感動したり、ハッと気付かされたりの連続。ちよっとくすぐつたような、面はゆい思いもしながら、大袈裟ではなく、このまちに生きていることの喜びを、読者の皆さまにも実感してもらえらるだろう。

「みくな」は、再発見案内誌のような役割を担っている。知っているつもりのことを、足で稼いだネタを使って、「えっ！ そうだったの」「へえ、こんなトコあったの」と読者を驚かせたい、そんな思いでつくっている。

ところが、どつぷりと平和座布団に胡座をかいてみると、自分の暮らしているまちの本当の良さに鈍感になってしまふ。それを内外のエッセイストは、見事な表現で気付かせてくれるのだ。

私自身、十七年前この湖北に帰ってきた。漂流しているような大都市での暮らし。満艦飾なのに、空虚な



時間だけが忙しく流れていく。それでいて自由。匿名の生活は自由という孤狼のこと、危うい自由……

十七年前の春。米川の水面をなでるように枝を伸ばした、満開の桜の下に佇んで考えていた。微かにシャギリの音が聞こえていたように思う。美しいと思つた。そして大きいため息をついて私は、「帰ってこよう」

と決意した。

神戸の町を離れた。そして十年後。神戸の町は……。ベビーカーを押しながら歩いた街角、子どもたちを初めて連れていった映画館、駄菓子屋をねだられた商店街も、もうない。思い出までもが焼き尽くされてしまった。

だから長浜のまちは命の恩人かも知れない。米川の流れがもう少し汚れていて、花が鬱陶しい感じの色だったら、シャギリの音が流れていなかったら神戸に執

着していたかも知れない。そしてあの未曾有の災害に巻き込まれていたかも知れないのだ。だから、改めてこのまちについて考えてみようと思う。このまちに、あるいはこのまちを育んでいる湖北というものに、なりふりかまわず、もつとこだわって、のめり込んでみたい。

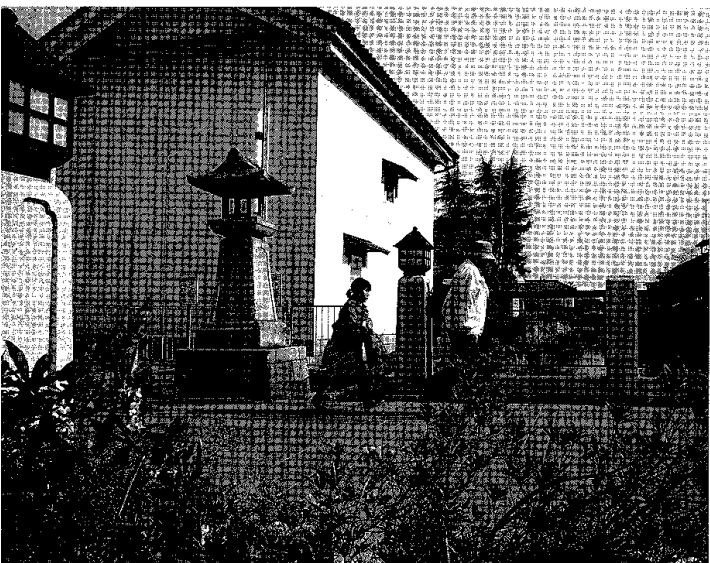
その道案内に「みくな」はとていい学習手本。なかでも巻頭を飾ってきた数々の名エッセイこそは、知ってるはずのことを気付かせてくれるのだ。

表現者は、素敵に形容してくれる。長浜を「狐につままれたようなまち」(冬二)だとい、国友のまちを「伊吹山の霧で洗いつづけているように清らかである」(遼太郎)と書き、「湖は月光に上から照らされ、その周辺をたぐさんの十一面観音で飾られ……」(靖)と、また「フィンランドのようだ」(周作)とも。そんな表現があるなんてためらってしまう。だから、先にふれたように、ちよっとくすぐつたいような、面はゆい思いがするのだ。

そうした情感は、知っていて当然のことを知らなかっただろうと他所の人に指摘されたような、かっこ悪さからくるのかも知れない。

書庫の奥深くに埋もれさせてしまつてはいけないと、再び展覧した珠玉のエッセイをもう一度読み、湖北の光に遊んでいたきたい。

さて、冒頭の疑問に答えるには、故中島智恵子元長浜市立図書館長について語らねばならないのだが、紙面が尽きたので別稿(46頁)に譲るとする。(姉川 渉)



# 「口と耳」を補う「目の力」

## 湖北の港の風景亦遷写真から

琵琶湖博物館 総括学芸員(当時)

嘉田由紀子

左にふた組の今昔比較写真がある。ひと組は、湖北町尾上の港付近と、もうひと組は、西浅井町菅浦の舟溜り。古い写真は前野隆資さん、新しいのは古谷桂信さんがうつされたもの。

琵琶湖周辺での生活文化について、地域の皆さんからいろいろ教えていただくのが私の専門(？)である。琵琶湖博物館には、生物学とか考古学とか歴史学とか、いろいろな専門家がいます。化石の名前やラテン語の学名を知っていたり、古文書を読めたり、といわば専門家としての「特殊技能」が求められる博

物館の研究職(学芸員)の中で、「口と耳」だけの「聞き取り」に頼る私のような存在は人に誇れる「特殊技能」がない。話ぐらいいだれだってできるし、「聞き取り」という方法もあやしいものだ。人はちよくちよく気が変わるし、相手によって言うことも変わる。「何で人の話だけを聞いていて研究ができるのか」という質問にしばしば悩まされた。

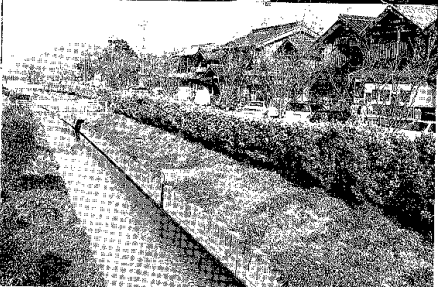
だ。まして、昔の話など、どうやって思い出してもらって、どうやって言葉にしてもらおうのだろう。その上、私の研究テーマは、湖と人間のかかわりの環境変遷、「環境」など、とらえどころがなく、言葉にならない。それに私は滋賀県生まれではない。昔の琵琶湖を知らないべし、道路になっているところをみて、「ここはな、昔は舟溜りやった」「川には洗いの場があった」「川には洗いの場があった」と言われても、その人が語る「舟溜り」や「洗いの場」の具体的光景はうかんでこない。

そんな風に頭を悩ませていた一九八〇年代に出会ったのが前野隆資さんの写真だった。急激な環境変化をこうもる前の昭和三十年代の琵琶湖辺りや内陸部の日常生活が数万枚のフィルムに克明に残されていた。なつかしい友に出会ったように、これらの写真にひきこまれた。そ

して古い写真をプリントして、それぞれの現場探しをし、当時を知る人から聞き取りをさせてもらった。今や「口と耳」に「目」が大きな武器となっている。うまくすればその場で生きてきた人の「心」に迫ることも可能だ。写真の力は大きい。といったところで、皆さんご

自身、この写真比較から何がみえてきますか。皆さんのすぐお近くの風景です。この写真をもつて、現場をたずね、タイムスリップのわくわくどきどきを体験してみてください。

(58号・九九九年六月発行に掲載)



尾上港  
(上) 1955(昭和30)年  
撮影・前野隆資  
(左) 1997(平成9)年4月  
19日 撮影・古谷桂信



菅浦港  
(上) 1968(昭和43)年4月21日 撮影・前野隆資  
(右) 1997(平成9)年4月19日 撮影・古谷桂信

(写真提供/琵琶湖博物館)

**琵琶湖水鳥・湿地センター**  
(湖北町今面 TEL.0749-79-9022)

びわ湖がラムサール条約登録湿地に指定されたのを受けて建てられた、びわ湖や水鳥、魚について学べる施設。  
(<http://www.biwase.np/nio/>)

**北淡海・丸子船の館**  
(西浅井町大浦 TEL.0749-89-1180)

昭和30年代まで大浦港で活躍していた本物の丸子船を展示。びわ湖水運の歴史がわかる資料館。



■かだ ゆきこ  
寛年の埼玉生まれ。学生時代からアフリカ、アメリカ、日本国内農漁村でのフィールドワークに魅せられる。1981年から琵琶湖周辺での環境社会学研究にかかわる。長浜はじめ湖北にはちよと「カーナ」創刊の頃より足繁く通う湖北ファン。最近孫が生まれ、あたり前に生きてあたり前に死ぬ意味が現実になつた。著書に『生活世界の環境学』『水と人の環境史』(共編著)など。2000年より京都精華大学教授。